

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2011年7月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.53 「リーダーになる・育成する」

社団法人日本青少年育成協会主催の「2011 次世代リーダー育成セミナー」が終了しました。毎年、若い塾人が中心になって受講するセミナーですが、中には中年の?個人塾経営者も参加しています。今回は「リーダー」について考えてみたいと思います。

これまでの日本社会は、本当の意味でのリーダーは必要なく、世話係が存在すれば充分でした。なぜなら、目指す目標が明確だったからです。高度経済成長時の日本は、アメリカに追いつくことが目標でした。「アメリカ」という目指すものが明確でしたので、必要なことは「早く目的地に到達するための方程式」を解くことでした。いわゆる処理能力が求められました。そうした社会に必要なのはリーダーではなく世話係…マネージャーです。組織に在する構成員間の調整をして、最も効果的な行動を指示すれば良かったのです。

ところがアメリカと並び立つところまで発展した日本は、次に目指すべき目標を失ってしまいました。本来、そうした時に明確な目的地を示し、組織を引っ張っていく…いわゆるリーダーが必要なのですが、残念ながらリーダーを育成する教育を日本は行なってきませんでした。それがバブル崩壊後の低迷の大きな一因です。

これからはリーダーを育成する教育が急務です。そのためには子ども達を指導する塾人が、子ども達の良きリーダーにならなければなりません。

そもそもリーダーの役割の第一は、明確な目的地を提示することにあります。問題は、その目的地が本当に「幸福の大地」かどうか、誰にも分からないことです。そのため、誰もが目的地を主張することに躊躇します。奥床しい日本人は、自己主張が苦手です。そこで必要なのが決断力です。

決断力とは「物事を早く決めるスピード」を指して使われることが一般的ですが、それは決断力の一部であって、全てではありません。以前もお話したように、決断とは「どこにもない答えを創る行為」です。目的地（幸福の大地）はもともと存在するのではなく、自らの力で作り出すものです。リーダーに求められる決断力とは、理想の目的地のランドデザインを示し、自ら作り上げる実行力をも内包する概念です。

どこかの塾を理想として真似るのではなく、自ら理想とする塾を掲げ、それに共鳴した仲間と共に作り上げる役割が塾業界のリーダーです。そしてリーダーシップとは、その実現までの長く苦しい道のりの行程を、組織のモチベーションを落とさずに（向上させながら）引っ張り続ける力のことです。

リーダーとは周りから押されてなるものではなく、自らの「決断」によ

て初めて存在するものです。つまり、リーダーの第一歩は「自分はリーダーになる」と決意することです。リーダーは我を通して自らの道を進むイメージがありますが、実は真逆です。他の人に配慮を欠かさず、多くの味方に囲まれているため、自ら進みたい方向の道を周りの人が喜んで空けてくれるのです。そして、あなたの後を安心して付いていきます。

世の中、「俺は自由に生きていく」と叫んでいる人ほど不自由な人生を送っています。

今、日本は大きな転換期を迎えています。戦後の高度経済成長期に活躍したトップランナー（団塊の世代）から次の世代へとバトンが渡されようとしています。江戸幕府が家康から実質は三代家光へと継承され、安定した政権を確立したように、バトンの受け手は若者でなければなりません。なぜなら、転換期に必要なのは改善ではなく改革だからです。改革は、明治維新を持ち出すまでもなく、いつの世でも若者の仕事です。

これまでは改善を繰り返すことによって塾業界は発展し、子ども達の成長に役立ってきました。しかし、バブルの崩壊、リーマンショック、そして何より、今回の大震災と原発事故は、日本社会の価値観を根本から変えてしまいました。その社会に適應する人材を育成するには改善ではなく、新しい発想による改革が必要です。社会のニーズに合わせた行動をとる人材ではなく、新たなニーズを生み出す「人財」を育成することです。方程式を解く「人材」ではなく、方程式そのものを作り出す能力を持った「人財」が求められています。

それは…

人の希望に合わせる者ではなく、人の希望を作り出す者です。

人の望みを叶える者ではなく、人の望みを作り出す者です。

…生徒の学習意欲に応える塾人ではなく、生徒の学習意欲そのものを作り出す塾人です。

それを可能にするのは、人の情熱以外にありません。これまでの日本社会を支えてきたものはテレビ、冷蔵庫、自動車、クーラー…いわゆる物質に対する欲望でした。それらが満たされたこれからの日本は、より良き社会を自ら想定し、自ら行動する「情熱」が社会全体を形作っていくことでしょう。96%の人に理解されなくても、どこかに存在する4%の人に向けて発信し続ける情熱です。

「あなた」は子供たちのリーダーになって、次の日本を背負っていく本物のリーダーを育成してください。

第5回 詰め込み教育はどんなのか？

毎日暑い日が続きます。今年は節電も重なり、本当に暑い夏となりそうです…。どうか熱中症などにならないように、十分な暑さ対策をとってください。ちなみに私は「おしゃれステテコ」を愛用中です笑。

さて、今回は本題に入る前に、最新の情報を二つご紹介します。

まず一つ目は、7月8日（金）に文部科学省から発表があった件です。

2013年から「全国学力調査」が「全員参加」で実施する方向で検討されることになりました。まだ確定したわけではないです。ただ、2010年から全体の3割参加の抽出方式に変えたばかりなのに…。受験対象は「小6」「中3」の「全員」です。

しかも、来年度からは「国語」「算数」「理科」の3教科実施となります。これは確定です。

ついに「理科」が入ってきました。中3理科は塾でも対応していますが、小6理科が必須となるのは大きな変更です。これは塾にとっては良い題材かもしれません。これを機会に非受験小学生コースに「小6理科対策コース」という新しい授業も開講できそうです。理科担当の先生はぜひ一念発起してほしいと思います。

二つ目の最新情報は、日本の隣「韓国での教育事情」についてです。

先日、韓国政府は、小中高教科書すべてを2015年までに「電子教科書」にすることを発表しました。しかも、来年から従来の紙の教科書のほかに、「e-教科書」と呼ばれるCD-ROM製の電子教科書を使用していきます。またそれ以外に、一般書籍や教師の手作り教材も、審査に通過すれば、教科書として使用できるようになります。来年は英語・数学・国語の電子教科書を配布する予定で、義務教育の小中学生には無償で電子教科書の提供をするようです。

実は、韓国では、2007年から小学英語の教科書をすでにデジタル化させており、徐々に実験校を増やしていました。また、黒板もすでに電子黒板が一般化しており、国策として政府が率先して、普及に努めています。

今回の発表により、韓国全教員にタブレットPCが支給され、教科書の電子化は加速することが間違いないです。

ようやく本題です。

今回は「詰め込み教育はどんなのか？」です。先に韓国の話題に触れたのも、少々かわりがあります。

韓国では社会的な事情により、受験戦争が日本の比にならないくらいすごいです。受験に失敗すれば、人生が終わるといえるくらいです。「韓国は韓国、日本は日本」という声が聞こえてきそうですが、他人事ではありません。

日本では新学習指導要領が始まり、ゆとり教育からの脱却が顕著に表れてきています。学習する内容が格段に増え、子供たちの負担は激増しています。暗記する内容も増え、詰め込み教育偏重型になるという意見もあります。ただ、韓国と日本の決定的な教育方針の違いは「生きる力」にあります。

この「生きる力」というのはとても重要です。例えば、理科の実験は「なぜ」その結果になるのか、社会の新聞作りは「どうやって」作れば読みやすいか、算数の円の面積は「なぜ」円周率をかけるのか、国語の漢字の成り立ちは「どのようにして」できたのか…などなど。単に文字を暗記して、そのアウトプットを競い合う受験戦争ではなく、「原因」「理由」を模索し、自分で判断し、結論付けていくという過程が「生きる力」へとつながっているのです。

ただ、この「生きる力」を活かすためには、「基礎力の充実」は必須です。そのため、基礎的な学習内容をスパイラル式に学習させ、定着を図ることが、今回の新指導要領の内容の一部になっています。

つまり、日本が目指しているのは「詰め込み教育」ではないということです。暗記することはたくさん増えましたが、それもすべて「生きる力」に反映させるためです。生きるためには「目標」が必要です。その「目標」は決して他人に与えられるものではなく、自分で探し求め、判断し、見つけていくことが大切です。この新学習指導要領により、「多くの子供たちが自分の夢を見つけて邁進していく」…そんな教育になればいいなと思います。

今回の内容については、異論反論いろいろあると思いますが、一つの意見として読んでいただければいいと思います。。。

いよいよ夏期講習が始まりますが、節電&暑さ対策をして、万全の体制で臨みましょう！

次回は、「新しい教科書について」を説明していきます。では、また。。。

ほとんどの塾が個人経営から企業化され、組織として成熟して大手塾となっているが、継承問題は例外なく深刻であり、最優先課題であるにもかかわらず、解決しきれない問題も孕んでいます。各地の論客である経営トップや幹部の方々に、継承問題について取材しました。都合上、匿名とさせていただきます。

■日本の危機もわからない政治家ばかり？

——「東日本大震災の復興」についてご意見お聞かせください。

国民は皆さん我慢していますが、政治家はこらえ性がなく、リーダーシップもない。危機感を感じないで遊んでいる人もいるし、権力闘争だけにうつつをぬかしている人もいます。怖いのは、日本の危機もわからない人たちが政治家だと、世界が動いていても気づかないのではないかということです。たとえばすぐ近くには北朝鮮という前時代的な恐ろしい国家があるのに、攻めてこられても守れないのではないかという現実的な不安が募ります。

地震と津波の被害も大変ですが、原発事故の影響は広範囲にわたり、長期間かかると予想されますが、塾としてもきちんとした対策が必要でしょう。特に被災地に近い塾ほど影響が大きいので、その支援も業界でやっていく必要があると考えます。

■建てた家を消してしまう人はご勘弁

——継承問題について塾長のお考えをお聞かせください。

ロシアにこんな話があります・・・親が立派な家を建てました。建てるまで頑張って働きすぎて、疲れて病気になり、そして亡くなってしまいました。親から大学まで通わせてもらい、立派な家まで残してもらった子供は、夢だけは一人前でしたが、現実的ではなく、冬になるととどろん暖炉に薪をくべて暖まりましたが、落ちていた薪はなくなり、いつしか家を壊してくべました。物置を壊し、二階を壊し、それでもまだ『大丈夫だ』と呑気に考えていたそうですが、ついにある冬の夜、最後の薪をくべたら、寝ることもできなくなりました・・・親

がどのような気持ちで家を建てたのか、それを理解できない子どもを会社の継承者と置き換えれば、余計な説明は要りませんね。

会社の経営では利益が優先するのではなく、どれだけ創業の精神を理解して堅実な仕事をするかが問われます。最低限それができなければ、いくら新しいチャレンジをしても成功などしませんし、仮に少し成功しても長続きはしません。

■自分から人を掌握しようとするな

——継承者の人心掌握はどうすれば上手くいきますか？

まずは聞き上手になることです。リーダーだから何事も率先してやる必要はなく、誰かが提案したことが良いと思ったら全面的に支援してあげる・・・そうすれば、自然に人はついてきます。一呼吸置いて行動する、一晩考えて意見を言う・・・そういう慎重さ、そして若い人たちの邪魔をしない配慮をする、そうすればいやが上にも一目置かれる存在になります。

周囲から、『あの人ならどう考えるのか、あの人ならどう動くのか・・・』と思われるような存在になればいい、自分から人を掌握しようなんて考えないほうがいいのですよ。

■社員に仕事の楽しさを教えることが社長の役割

——人を束ねる役目をする人はどのようなことに気をつければいいですか？

つねに学んでいる人、何か貴重な情報が集まる人、慕われる人はどんな時でも大事に扱われます。たとえ、若輩であっても、そのような心がけで仕事をするのが大切であり、仕事を離れても色んな人に会い、情報交換をしたほうがいいでしょう。人を束ねるために人が集まっているところにずっといる必要はないのです。

会社のトップは経営する人というよりも、社員に仕事をする楽しさを教えてあげる役目なのだと思ってもいいのではないですか。

**震災三日で消えた人たち**

水戸市では、震災後三日目から「急激な変化が起きた・・・」とI氏は語ります。

「当日と翌日にできるかぎりの情報を集めて、引っ越しと転校の準備を進め、週明けに学校と塾に連絡があった。父親は仕事があるから単身で残り、母親と子どもたちだけで避難・・・それも名古屋とか関西とか、あるいは海外とか」

いわき市でも「同じような現象があった・・・」とO氏が語ります。

「各高校のトップの生徒から順に消えていった。できるだけ遠くに行くみたい。首都圏もいるけど、関西とか九州とか沖縄とか・・・一時避難ではなく、永住みたいでしょう。南半球に行った人もいるし、『先生長い間お世話になりました。これで最後ですねえ』なんて。こっちは動く気などサラサラないけど、あの人たちは早い」

水戸市で一番早く動いたのも、いわき市で最も動きが顕著だったのも、いずれも東電の社員もしくは東電関連の会社の社員の家族だといいます。おそらく最悪の情報が導火線のように伝わっていったのでしょう。最新の情報を握っていた彼らは迷うことなく、家族を最優先で避難させ、その次は親戚、知人・・・公共の仕事に関わっているから守秘義務があるのでしょうか、それは公務員と同じで自分の身内は例外なのです。

放射能被害・・・異聞

これ以上の混乱を避けるためか、放射能の数値は高いはずなのに、福島市から川俣、伊達、郡山市までの周辺は、よほどのことがない限り、避難指示がゆるくなっています。これについて地元の経営者団体の理事は「ある程度避難させたら、あとはめんどくさいんだべなあ」と言います。

「学校の校庭とか掘り返しているのは一種のパフォーマンスだな。だから・・・公園とかはやってねーべ。全部やったら大変だからな」

原発事故の現場では、メルトダウンがかなりあとになって公表されているし、今になって被曝限度を超えた作業員が次々

と出ています。

「作業中に死んだ人も湯本温泉に泊まっていて、毎日」ビレッジに通っていた。でもある日点呼しても一人いつまでたってもバスに戻らなかった・・・すでに施設の中で死んでいたから」

危険な施設の管理もダメ、情報管理もダメ、人員の管理もダメ・・・いつになったら、日本は国際社会でも通用するマネジメントが可能になるのでしょうか？

「はした金は要らねえ・・・」

福島市に近い避難所での話です。首都圏から慰問に訪れた人が支援物資とともに「御見舞金」を渡そうとしました。リーダー役の男性は礼も言わずに「いくら入ってるんだ？」と凄みをきかせた顔で相手に迫りました。

「五万円ですが・・・」と答えると、突然男性は渋い顔をして「こんなはした金もらっても仕方ねえから、持って帰れ。正直言うと、支援物資もこれぼっちだと、みんなで分けたら少ししかない。金だって最低百万円はもらわないと一人分はわずかだ・・・」

おそらく、本人も何を言っているのか、なぜ自分がそんなことを言う必要があるのか、わかっていないのでしょうか・・・彼らはそこまで追い込まれているのです。見通しの立たない避難所暮らしは、精神的にも大きなダメージを与えはじめています。

大熊町や南相馬の人たちは、原発の放射能が高いから避難していたはずなのに、避難先の飯館のほうが高かったという、東電と行政の勝手際もあり、全くの人間不信に陥っています。一度失った信頼関係が回復するのも遠い先になりそうですが、改めて教育の必要性を痛感する次第です。